

地雷除去から発する

「ピース・ロード」のメッセージ

【富田 洋 プロフィール】

慶應義塾大学工学部卒業。ジオ・サーチ（株）会長。
世界初の企業連合NPO「人道目的の地雷除去支援の会 JAHDS」
を設立し、タイ・カンボジア国境付近にて除去プロジェクトを推進中。

富田
洋



数々の悲劇を生み出した戦争の世紀と言われた20世紀が過ぎ、新たな世紀が訪れても今なお世界に無数に存在する地雷や不発弾等の残留危険物による被害は後を絶ちません。一方、様々な除去技術を用いても、100%の安全を確保するためには現在年間10万個の地雷を除去することが精一杯の実情です。今から一つも地雷を埋めなくても、地球上の地雷をなくすには1000年かかることになる訳です。また残留地雷による被害は、手足を失ったり、命をなくすという直接的な被害に加え、地雷に汚染された地域は紛争後も一向に復興しないということです。経済的にも非常に苦しく、人々は日々命の危険にさらされているばかりでなく、貧困に苦しんでいるのです。

私が旧建設省と(財)道路保全技術センターの協力で考案・実用化した世界初の道路陥没防止を目的とした探査システムは、神戸・北陸・九州等の震災後調査でも安全を確保する成果を上げ、延べ調査距離は既に地球一周分以上、世界的にも例のない実績を築いています。このシステムを国際学会で発表した後、1992年国連の初代地雷除去責任者の訪問をうけ、紛争後の残留地雷探知への技術協力を要請されました。その2年後、スウェーデン政府が開催する専門家会議に出席し、初めて残留地雷等により自分の息子二人と同じ年頃の多くの子供たちが手足を失う実情を知り、一市民ボランティアとして探知技術開発に着手しました。



地雷・不発弾等の残留危険物

試作機のテストで何度もカンボジアを訪れ被害の実態を知れば知るほど、何とかしなければという想いの日々でした。そこで、同じ志を持った人々や企業が集まり、人道目的の地雷除去支援の会JAHDS（ジャッズ）が、98年3月発足することになります。当初はカンボジアで活動する国際NGO機関へ資金・資機材を提供しましたが、インフラが整っていない地域では除去後も復興が具体化せず、住民の生活も一向に向上しません。また間接的支援のみでは充実感もなく、悩む日々が続きました。



毎朝、作業前に安全確認をする朝礼
(右端 富田)

危険物を除去することは、人命の安全保障はもちろんのこと、周辺地域の貧困撲滅と紛争予防につながり、紛争後の地域の自立と経済復興、さらには文化の再生を促すことに他なりません。以来、メコン地域の地雷被害調査をし、除去の効果が見込まれる地域を選定し、プロジェクトの企画・実施・資金調達すべてを行えるプロフェッショナルな体制作りに励み、間接的支援からいよいよ直接支援に乗り出すことになったのです。

2002年12月～2004年1月にはタイ・カンボジア国境のサドック・コック・トム寺院周辺41万㎡（甲子園球場10ヶ分）の土地の浄化を、2004年6月からは同国境にまたがるアンコールワットよりも古いクメール文明の大遺跡プレア・ヴィヒア寺院とその周辺地域31万㎡での第1期事業を遂行しました。そこは、カンボジア内戦時の激戦地域で、今もなお大量の地雷が残っており、JAHDS除去員チームが日々の緊張をともなう危険な作業を続けています。安全宣言後は、タイ国政府はエコパークを建設予定、カンボジア側ではジャングルを切り拓き、容易に近づけなかった遺跡への道路建設を計画し、遺跡のユネスコ世界遺産への登録を準備中です。このような状況下、周囲の熱い期待に励まされ、2005年7月第2期事業を開始いたしました。「ピース・ロード」を合言葉に、アジアの平和創りに貢献できるプロジェクトとして、新たに増員した除去員を加え総勢50名を越える現場スタッフの士気は益々盛んで、本年7月の完工を目指し除去は順調に進行中です。